



東北大学附属図書館報 木這子

BULLETIN OF
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>

ー木這子（きぼこ）とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子（こけしぼうこ）ー

目 次

○図書館情報処理システムの更新について・・・・・・・・・・	1	○平成 22 年度東北大学附属図書館企画展	
○学生選書企画 ～ Book Harvest 2010・・・	3	「クールジャパンのルーツをたずねて	
○「東北大ゆかりコレクション」設置に伴う		～江戸庶民の楽しみ～」開催報告・・・・・・・・・・	9
資料寄贈のお願い・・・・・・・・・・	4	○若手の夢を職員企画ワークショップで実現！	
○シリーズ 東北大学附属図書館分館等紹介 その 7		～国立大学図書館協会東北地区協会助成事業での試み～	16
法政実務図書室・・・・・・・・・・	5	○会議・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	18
○平成 22 年度大学図書館職員短期研修を受講して・・・	8	○編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・	20

図書館情報処理システムの更新について

総務課学術情報支援係 對馬 庸二

平成 22（2010）年 12 月 20 日から新しい図書館情報処理システム（T-LINES: Tohoku University Library Information System）が運用を開始しました。今回で 5 回目となるシステム更新について、経緯、システム構成、機能及び課題について報告します。

1. 経緯

昭和 62（1987）年に東北大学附属図書館で図書館情報処理システムを初めて導入して以来、附属図書館では 4 年ないしは 5 年ごとにシステム更新を行ってきました。

今回のシステム更新は、情報検索の主流としてグーグルなどのインターネットの大規模検索サイトが定着し、学術情報のナビゲーション・システムとして図書館情報処理システムが提供する情報の種類と検索方法が問われる状況の下でのシステム更新となりました。

また、今回のシステムでは、「紙も電子も」という表現が示すように媒体のいかにかわからず、シームレスな方法で一体となって利用できるハイブリッド・ライブラリーの構築を念頭に置き、特に電子情報資源の円滑な利用のために電子ジャーナル及び電子ブック等の情報を蔵書検索システム（OPAC）に反映させるとともにリンクリゾルバの導入によるアクセス環境の改善を行いました。

2. システム構成

図書館情報処理システムは Web プラットフォームをベースとしたもので、サーバ群と端末パソコンによる機器構成は前システムの構成を継承しながら、機能を一層強化しています。

(1) サーバ群

サーバ群は、データベースサーバ、アプリケーションサーバ、情報サーバ、プロキシサーバ及びバックアップサーバから構成されています。

(2) 端末パソコン

端末パソコンの OS は Windows7 モデルに更新され、端末側の推奨ブラウザも IE から FireFox に変更されました。また、これまで使用していたメーカーが Windows7 ではサポートされないため、今回から Thunderbird に更新されました。

(3) ネットワーク

本・分館で構成していた仮想サブネットワークの構成を継承し、さらにファイアウォールを導入し、ネットワークの安全性の強化を図りました。

3. 機能

図書館情報処理システムは日本電気株式会社製の学術情報システムパッケージ「E-CatsLibrary」を導入し、本学の環境に合わせて、機能強化及びカスタマイズを行っています。

図書館情報処理システムの機能は、大きく分けると業務処理機能と情報サービス機能から構成されています。今回のシステム更新の目玉である情報サービスの新しい機能を中心に紹介しましょう。

(1) 蔵書検索システム (OPAC)

今回提供された OPAC は従来の OPAC にはない、所蔵館、資料区分、出版社、著者、キーワード等の検索結果の絞込み要素を例示するファセット機能や図書の表紙イメージが追加されています。今後の一層の機能強化が期待できる機能です (図 1 参照)。

また、(3) で説明するリンクリゾルバから電子的情報減についての情報を取り込むことにより、

電子ジャーナルと冊子体雑誌を同時に検索できるようになります。

(2) オンラインサービス

MyLibrary を利用した資料予約・取寄せ等の機能に加えて館内のゼミナール室や研究個室の施設利用予約管理機能が追加されました。

(3) リンクリゾルバ

他大学に比べて導入が遅れていた Serials Solutions 社製のリンクリゾルバ 360Link を図書館情報処理システムの一部として導入しました。リンクリゾルバは Open URL 技術を活用し、Web of Science のような二次情報データベースや蔵書検索システム (OPAC)

から電子論文の全文へリンクする機能が実現します。これによって、文献の二次情報から電子情報資源への切れ目のないアクセスが容易になることが期待されます (図 2 参照)。

4. 課題

図書館情報処理システムが提供すべき情報の対象 (何を)、範囲 (どこまで) および方法 (どのように) については曖昧な点が多く、特に情報サービスについては、常に技術の動向やユーザの情報要求を捉えながら継続的に検討していくことが必要です。

また、情報サービス機能は利用者を直接の対象としていますが、現在のシステム導入体制では利用者の意見が反映されにくい状況です。情報サービスシステムの運用開始以前に一定の期間、利用者からの意見を求められるような導入スケジュールの検討が必要です。



図 1-1 OPAC 検索画面



図 2-1 二次情報データベース検索結果



図 1-2 OPAC 検索結果表示画面



図 2-2 リンクリゾルバ中間窓

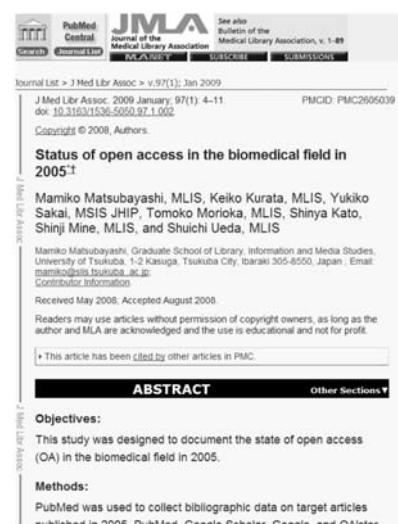


図 2-3 論文全文の表示

更に、業務システム機能の検討の際には、時間の制約の関係でシステム更新作業の際に十分な業務の見直しが行われず、現行システムの機能継承ばかりが重視されがちになります。システム更新時だけではなく、業務形態と業務システム機能の精査及び変更を行っていく必要があります。

5. おわりに

新しい図書館情報処理システムの運用を開始してから2ヶ月が経過したが、懸案事項が残っており、その解決に向けての努力が続いています。その要因として、運用開始以前の機能検証や導入ス

ケジュール管理に問題があったと考えています。特に、ワーキンググループを中心にした検討体制や更新スケジュールやスケジュール管理等の反省点については整理した上で今後のシステム更新の留意事項として継承したいと思います。

最後にそして最小ではなく、システム更新に当たり、お忙しい中時間を割いて仕様策定及び技術審査にご協力くださった教員、職員、ワーキンググループのメンバー及び図書館職員のみなさまにこの場を借りて深謝いたします。

(つしま ようじ)

学生選書企画 ～ Book Harvest 2010

情報管理課受入係

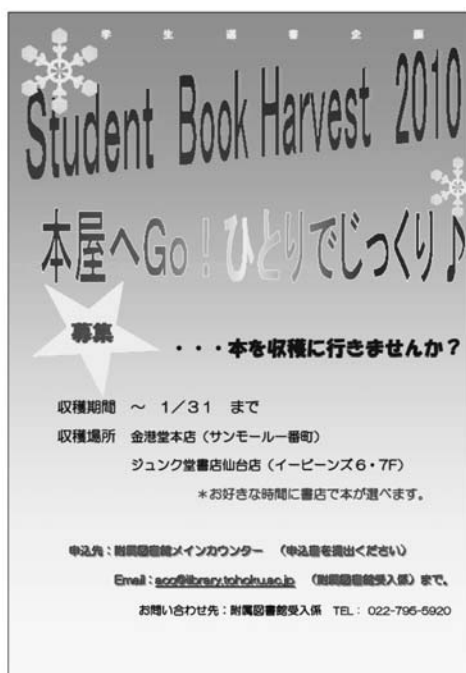
今年度も昨年度に引き続き学生選書企画「Book Harvest 2010」を実施中です。書店の書棚から直接読みたい本を選ぶ「本屋へGo！ひとりでじっくり♪～」と、サークルやゼミの単位でテーマを設定して本を選ぶ「テーマでGo！仲間と一緒に♪～」の両企画です。

日頃、学生の皆さんが利用する本は、授業の内容や大学生として身に付けるべき教養を加味しながら慎重に教職員によって選定されています。他に利用者の皆さんからのリクエストされた本も取

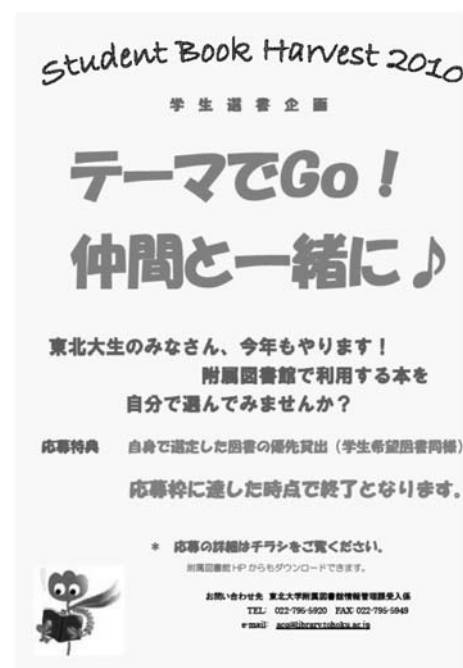
り入れています。

今回の企画は、学生リクエストの拡大版として、学生の皆さんのご要望を積極的にお応えするもの。奮って参加の上、個性あふれる珠玉の一冊をご推薦ください。

選定された本は、後日皆さんにお知らせいたしますので、少しの間お待ちください。また、館内に展示の予定です。今年はどんな本が収穫されるのかお楽しみに！



学生選書企画 ポスター
「本屋へGo!ひとりでじっくり♪」



学生選書企画 ポスター
「テーマでGo!仲間と一緒に♪」

「東北大ゆかりコレクション」設置に伴う資料寄贈のお願い

情報管理課

附属図書館は平成 23（2011）年 6 月に創立百周年を迎えます。この機会に附属図書館本館では、本学卒業生や教職員経験者など東北大学にゆかりのある方の活躍や活動を来館するみなさまに広く紹介するため、関連する著作などを積極的に収集・整理し、展示するコーナーを本館 1 階に設置することになりました。これらの資料は「東北大ゆかりコレクション」として継続して整備する予定です。このコーナーでは、ご恵送いただいている東北大学出版会の出版物も合わせて配架し、本館開架図書に準じて館外貸出を行うことにしています。本コレクションの当初の整備予定は 400 冊を見込んでいます。

現在、平成 22 年度に配分を受けた総長裁量経費の一部で、卒業生を中心に学術書に限定せず、次の方の著作や関連する資料の収集を行っているところです。

伊坂幸太郎、瀬名秀明、青木美智男、有馬哲夫、大澤信一、木田元、高城高、近藤哲、今野勉、齋藤史子、佐藤賢一、田中宇、津本陽、中村彰彦、前田勉、松長有慶、安村俊信、内館牧子、豊田章一郎、枝野幸男、山折哲雄、井原裕、川崎健、北杜夫、國貞克則、小松正之、笹沢教一、伊達宗行、鳴海風、藤井直敬、藤森照信、細谷亮太、大角修、日沼頼夫、安田喜憲、保江邦夫など（敬称略・順不同）

しかしながら、「東北大ゆかりコレクション」の対象となる資料は膨大で、既に現在入手できないものも多数あり、また予算も限られています。そのような厳しい条件にもかかわらずできる限り早く充実したコレクションを構築し、来館するみ

なさまに利用していただきたいと考えています。このため、本学の在学生卒業生、学位授与者、教職員経験者のみなさまに学内・学外を問わず、ご著作の寄贈をお願いすることにいたしました。現在、お手元にある図書の他に新しい著書を上梓された場合には是非以下の宛先にご恵送くださるようお願いいたします。また、恐縮ですが、著作の送付に係る費用についてもご負担くださるようお願いいたします。

また、本学で刊行された出版物についても本館では収集していますので出版の都度ご恵送くださるようお願いいたします。

なお、本学関係者の蔵書についてのご恵送については「東北大ゆかりコーナー」の収集範囲を超えますので、個別にご相談くださるようお願いいたします

「東北大ゆかりコレクション」の連絡・送付については以下までお願いいたします。

東北大学附属図書館 情報管理課専門員

〒980-8576 仙台市青葉区川内 27-1

電話：022-795-5919 FAX：022-795-5949

メール：tohoku_yukari@library.tohoku.ac.jp

シリーズ 東北大学附属図書館分館等紹介 その7

法政実務図書室

法学研究科 法政実務図書室

■はじめに

シリーズ第7回目は、片平キャンパスの法政実務図書室を紹介します。法政実務図書室は2010年7月に開所したエクステンション教育研究棟（旧本部棟）の1階にあります。法学研究科の法科大学院と公共政策大学院の授業支援を目的としています。両大学院で図書室の利用形態が異なり、さまざまな運用の違いに細かく対応しています。大学院ごとの対応に加え、個々の授業担当教員とも連携を密にしています。

■沿革

2004年4月、法科大学院と公共政策大学院の設置に伴い、片平キャンパスの法政実務研修棟（旧法文学部2号館）1階に新設されました。購入した基本書に加え、故菅原菊志東北大学法学部名誉教授と故杉本正男判事の蔵書を寄贈していただきで発足しました。両大学院設置と同時に専用図書室を設置した国立大学は他になかったため、初年度は多数の見学者が訪れました。図書室と24時間使用できる学生自習室とが同じ建物にあることと、全学の図書館システムと直結した窓口業務により、利便性を高めたのが特色でした。

2010年7月、エクステンション教育研究棟に片平キャンパスの法学研究科関連施設が集約されたのに伴い、図書室も移転しました。法曹関係者を含む一般の利用者へのサービスも向上しました。

■蔵書構成

蔵書の中心は、授業で使用する図書と雑誌です。様々な予算で教員が選定した資料も所蔵しています。例えば、法科大学院の「法と心理学」関連図書（洋書）や「医事法」関連図書、公共政策大学

院ワークショップ関連図書は特筆できます。

寄贈資料は、故菅原菊志名誉教授に始まり故杉本正雄判事（元仙台地方裁判所所長）、小田滋名誉教授（元国際司法裁判所判事）、故逸見惣作弁護士（元仙台弁護士会会長）、藤田宙靖名誉教授（元最高裁判所判事）からいただきました。このうち、藤田先生の旧蔵書は「藤田文庫」として別置しています。それぞれ一目でどなたからの寄贈本であるかがわかるように、シールを貼付してあります。なお、寄贈していただいた方々に敬意を表し、写真と略歴を入口に掲げております。菅原慶子様（菅原菊志名誉教授夫人）からいただいた絵画は、書架と対峙する位置で図書室を見守っています。

■購入

新刊本の購入にあたっては、法改正に伴う図書の改訂も多く、指定教科書参考書を中心に、新版の刊行に迅速に対応しています。

なお、発注から目録登録、配架までを一貫して行っているため、短時間で利用者へ提供することができます。

■閲覧

エクステンション教育研究棟へ移転後の2010年10月より、法科大学院と公共政策大学院在学生のため、日曜日（午後1時から5時）も開室しています。利用時間が拡大したことにより、利便性が向上しました。

また、移転に伴い、修了生を含む外部利用者のための閲覧席を多数設置しました。

「キャンパス間資料搬送サービス」は、サービス開始と同時に参加し、本館からの取り寄せ利用が多数あります。本館のある川内キャンパスへの往復時間が不要になり、大変好評です。

■設備

移転に伴い、図書室の面積が 501 m²に倍増しました。閲覧机と個別キャレルを設置することにより、在学生のみならず修了生に対する学習環境を整備しました。

書架は開架書架の他に手動集密書架を設置し、蔵書の増加に備えました。また、在学中に病没した学生のご両親からの寄付金で、木製書架と雑誌専用書架を設置しました。

■おわりに

エクステンション教育研究棟は、1階中央に広報ギャラリーがあります。一般向けの展示もあり、静かな学習環境の場を保つこととの両立が図書室にとっての課題です。

さまざまな制約の中で、法科大学院と公共政策大学院のための図書室という源流を見失うことなく、発展していくことを望んでやみません。

法政実務図書室の立ち上げ、エクステンション教育研究棟への移転では、附属図書館本館の皆様にご多大なるご協力と励ましをいただきました。深く感謝いたします。

(文責：渡辺順子)

<連絡先>

〒980-8577

仙台市青葉区片平2-1-1

電話：022-217-4858

利用案内：<http://www.law.tohoku.ac.jp/>

[/library/katahira.html](http://library/katahira.html)



図書室入口



寄贈者紹介コーナー



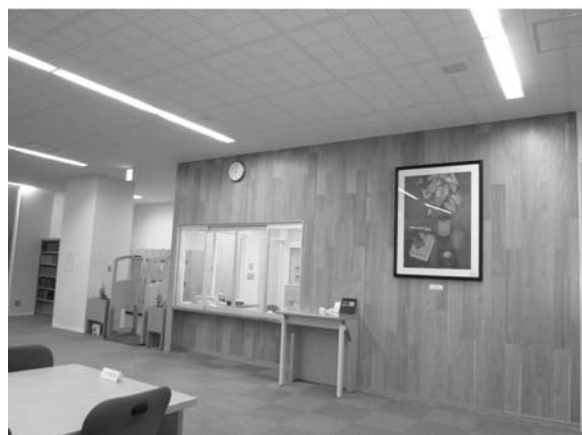
エクステンション教育研究棟



書架



手動集密書架



菅原慶子様寄贈絵画「追憶」



個別キャレル



寄贈書架（吉村剛君在学記念）



閲覧机



寄贈雑誌書架（吉村剛君在学記念）

平成 22 年度大学図書館職員短期研修を受講して

医学分館運用係 坂本 香代

平成 22 年 11 月 9 日(火)～12 日(金)の 4 日間、東京大学において「大学図書館職員短期研修」を受講する機会を得ました。この研修は、大学図書館等の若手職員が、今後の図書館運営を担うために必要な図書館業務の最新の知識を修得することを目的に毎年東京と京都で開催されており、12 の講義とテーマ別のグループ討議及び発表、会場館の見学などで構成されていました。東京会場では、北は北海道、南は沖縄から集まった合計 36 名が受講しました。

講義内容は、著作権や目録の最新事情、学術情報リテラシー活動の実践事例、さらには図書館員のスキルアップ法に関するものなど実に多彩でした。また、毎日行ったグループ討議では、館種や規模が異なる図書館に属するメンバーで知恵を出し合い、活発な意見交換ができたことが貴重な体験となりました。

さて、講義内容の中で特に印象に残ったことを 2 つご紹介したいと思います。1 つめは「図書館は『答える』存在から『教える』存在へ変わりつつある」ということです。今や学術情報リテラシー教育は図書館にとって大きなウェイトを占めている重要な業務であることや、学習支援の場としてラーニング・コモンズを設置する大学が増えていることから頷けます。『教える』存在になるには、教育との連携を深める必要がありますし、私たち図書館職員にもより高い能力が求められることになります。そのためにはまず大学が求める学生像や、それを実現するために行われているカリキュラムの内容について理解を深めなければなりません。その上で教員との連携を図りつつ教育カリキュラムと連動することができれば、従来から行ってきた学術情報リテラシー活動もより効果的なものになるのではないかと感じました。

2 つ目は「管理職だけではなく、一人一人が考

えて行動し、現場レベルでマネジメントする必要があるのではないか」ということです。図書館だけでなく、大学自体も大きな変化の中にあり、図書館の役割や位置づけを明確にすることが求められています。その中で「マネジメント」はこれから大事な視点になるのではないかと感じました。つまり、普段から大学や図書館全体のビジョンや理念を理解した上で、職員一人一人が自分の役割や責任を意識して業務にあたる必要があるということだと思います。そのためには、利用者が本当に求めている資料やサービスは何か、図書館以外の分野とどう関わっていくべきかを考える必要がありますし、図書館員としての専門性を高めることや自分の強みを持つことも重要だと感じました。これら 2 点に共通していえることは、「待ち」から「攻め」の姿勢へと転じて、図書館の役割を他分野に積極的にアピールして理解してもらうことが必要であるということではないでしょうか。

研修から 2 ヶ月が経ち、日常業務に戻った今振り返ると、この研修は大変有意義な 4 日間だったと感じています。ひとまず普段の仕事のことは忘れ、様々な知識を吸収できただけでなく、幅広い人脈も作ることができた贅沢な研修となりました。講師をはじめ他の受講者からも多くの刺激を受けることができましたし、受講者同士の交流が現在も続いていることが大きな収穫の一つです。また、以前受けた別の研修でお会いした方と再会し、さらに交流を深められたことも嬉しいことでした。

最後に、講師の方々及び受講の機会を与えてくださった関係者の皆様、研修に送り出してくれた職場の皆様に心から御礼を申し上げます。

(さかもと かよ)

平成 22 年度東北大学附属図書館企画展

「クールジャパンのルーツをたずねて ～江戸庶民の楽しみ～」開催報告

展示ワーキンググループ

附属図書館では毎年、本学が誇る貴重な蔵書を様々な切り口のテーマで学内外の方々に親しんでいただく企画展を開催しています。平成 22 年度は 10 月 8 日（金）～11 月 4 日（木）の約 1 か月間、「クールジャパンのルーツをたずねて ～江戸庶民の楽しみ～」と題して、図書館本館 1 階展示室で開催しました。



現代日本のマンガやアニメ、ゲーム、アイドル、映像やアートといった大衆文化、ファッションや日本食などの生活様式は、「クールジャパン」（カッコいいニッポン）と称されて世界的に注目を集めています。もちろんこれらは様々な要素が積み重なって生まれてきたものであり、そのルーツは簡単に「これ」と言ってしまうものではありませんが、江戸時代に庶民が育んだ文化の中には、その萌芽の多くを見ることができます。今回は、このような観点から精選した資料を三部構成で展示しました。

◆ 第 1 部「読む」

江戸時代は、識字率が向上することにより、広く庶民階級まで本が読めるようになった時代でした。そのため、それまでは寺院での經典の出版が中心でしたが、次第に市井の版元による商業出版

が盛んになっていきます。

作り手は読者の心を掴むために作品をさらに魅力的で高度なものにしていき、そうした作品によって、さらに読書人口が増えていく。このような正のサイクルによって、江戸時代の出版文化は大いに発展することになるのです。

1. 古活字から木版へ

1 文字ずつバラバラのハンコのようなものを、文章に合わせて並べて印刷する活字印刷は、近現代には長く印刷の主流となります。

しかし江戸時代では、初期に古活字印刷と呼ばれて一時的に行われたものの、やがてはもともとの 1 枚の板木に文字を彫る木版印刷が主流となりました。その理由としては、日本語は漢字と仮名の二種類があり非常に多くの活字が必要なこと、活字は再版する時に組み直しが必要なことなどが挙げられるようです。

それに対して木版印刷は、文字をそのまま彫るので、当時一般的だった、文字が連なる連綿体という書体にも適していました。さらに、1 枚ずつ彫る手間はかかるものの、一度作ってしまえば同



十返舎一九『的中地本問屋』
（『黄表紙廿五種』より）

じものを繰り返し刷ることができるため、板木の所有がそのまま版權を意味していました。

加えて、木版印刷では文章だけでなく絵も扱うことができたため、浮世絵版画の技術も大いに発達します。その結晶といえる多色摺り木版画の「錦絵」は、絵師・彫り師・摺り師それぞれの高度な技術によって支えられていました。

こうした木版印刷技術の発達により、1つのページに文章と絵を混在させたものなど、幅広いジャンルの版本が制作されました。こうして生まれた出版物が、識字率の上昇に伴ない、広く庶民にまで普及していったのです。

2. 江戸の本屋

江戸時代の本屋は、現在のように本を売るだけでなく、版元として本の内容を企画・制作する出版社の機能と、実際に印刷して本にする印刷所の機能を併せ持っていました。そして、書物や浮世絵など、木版で印刷できる様々な出版物を積極的に生み出していきます。



葛飾北斎画『画本東都遊』
左奥の人物が蔦屋重三郎と言われている

例えば、『画本東都遊』に描かれている耕書堂の店主、蔦屋重三郎は、『滑稽五十三駅（東海道を膝栗毛）』で有名な十返舎一九や、浮世絵師の喜多川歌麿・東洲斎写楽などを世に送り出しており、現代ならば名プロデューサーと呼ばれるような人物でした。

しかし、出版物が普及したとはいえ、庶民にとって書物は決して安いものではありませんでした。そこで活躍したのが貸本屋です。借りて読めば安価で済むため、次第に庶民の読書機関として定着していきます。貸本屋は、170軒程度 of 得意先を、仕入れた本を背負って廻り、本を貸していたそうです。こうした活動も、庶民への出版文化の普及を支えていました。

3. 多様なイラスト付き小説

江戸時代の小説は、内容などによって、遊郭での遊びを描いた「洒落本」、ユーモア小説としての「滑稽本」、主に恋愛を扱った「人情本」、文学性の強い「読本」に分類されています。

これらは文章を中心とした物語で、挿絵が物語の中心となる草双紙よりも上等なものとされていましたが、それでも1冊に何ページかは挿絵が入れられており、読者にとっては挿絵も大きな楽しみとなっていました。

絵師の名前が作者と同じくらい大きく扱われているものや、『春色梅児誉美』のようなカラーの口絵からは、当時の挿絵の重要性を窺い知ることができるのではないのでしょうか。現代の若者向け小説における挿絵の重要性とも、通ずるところがありそうです。

また「読本」などに見られる、古今の歴史小説や説話・実話を参考にし、それらの要素を組み合わせるという創作手法も、現代の物語作りに影響を与えました。有名な『南総里見八犬伝』は中国の長編小説『水滸伝』を参考にしたと言われていますが、同様に『南総里見八犬伝』自体も、



為永春水著・柳川重信画『春色梅児誉美』

その想像力豊かなシーンの数々から「現代のエンタテインメントのひな形」と呼ばれ、多くの作品に参考にされています。

4. 絵と文の融合 ～草双紙～

江戸時代には、「草双紙」という、挿絵が中心でその脇に本文が書き込まれた、現代の絵本とマンガの中間のような出版物が生まれました。絵と文が互いに関連を保ち、絵の内容を文章で補いながら読み進める様式になっています。薄くて小さい手軽な出版物で、大衆読み物として流行しました。

初期の草双紙は、表紙の色によって赤本・黒本・青本と呼び分けられました。丹（赤の顔料）を用いた赤本と墨で染めた黒本は名前通りの色ですが、植物の汁で青く染めた青本は、退色して黄色になっています。

赤本の内容は子ども向けのお伽話などが中心でしたが、黒本・青本では演劇や物語を参考にして次第に複雑な内容になり、洒落と滑稽を含む大人向けの読み物として確立された『金々先生栄花夢』以降は、装丁は同じでもそれまでの青本と区別して「黄表紙」と呼ばれるようになります。その後、敵討ちなどを扱い物語がさらに複雑化していくと、複数巻を合わせた長編が作られるようになり、「合巻」と呼ばれるようになりました。

草双紙が当時の幅広い世代に読まれたことは、

今の日本でマンガがあらゆる世代に受け入れられていること、そしてその物語性を充実させていくことの下地となったのかもしれませんが。



山東京伝著・北尾重政画『金々先生栄花夢』
『金々先生栄花夢』の続編の1つ

5. 江戸の同人活動 ～連～

江戸時代に流行した「狂歌」は、通俗的な言葉を用いて諧謔性や滑稽を盛り込んだ短歌でした。はじめは上方で盛んとなり、江戸では明和6年（1769）に唐衣橘洲宅で開催された狂歌会をきっかけに流行が始まります。特に、天明期（1781～88）の江戸狂歌は「天明狂歌」と呼ばれ、大きなブームとなりました。

当初は武士階級が中心でしたが、次第に彼らの教えを受けた町人知識層が中心になっていきます。寛政の改革で一時は衰退しますが、その後は大衆化し、さらに広がっていきました。

また、狂歌の作者たちは、趣向や主義によって「連」などと呼ばれるグループを結成し、その連ごとに狂歌集を出版していました。現代で言う同人グループや同好会のようなものです。例えば、『狂歌画像作者部類』という宿屋飯盛（石川雅望）のグループの狂歌集には、奥州仙台の女性なども参加しており、様々な地域・身分の人物が参加していることがわかります。

近代の文壇や現代のマンガ・アニメ業界も、積極的な同人活動によって活力を得ていますが、江戸時代もこのような形で、多くの庶民が読み手と

してだけでなく作り手として、出版文化に活力を与えていたのです。



石川雅望編『狂歌画像作者部類』

◆ 第2部「観る」

幕の内弁当、助六寿司といった食べ物や黒幕、二枚目、十八番などの言葉は、江戸時代の芝居（歌舞伎）の影響が現代の大衆文化にまで及んでいることを垣間見せてくれますが、近年にわかにその魅力が世界的に注目を集めている日本のゲームやアニメ、ファッション等も江戸期を中心とした庶民文化と無縁ではありません。

そこで第2部では「観る」ことに着目し、江戸庶民の娯楽として絶大な人気を博した芝居（歌舞伎）と役者や美人、風景を描き庶民の情報源、流行の発信源になるとともに、彩色木版画「錦絵」が西欧におけるジャポニズム運動に大きな影響を与えることになった浮世絵、さらにはアニメの原点とも言われる絵本や絵巻物を通して、日本の文化が本来持っている魅力、例えば発想や想像力の豊かさ、多様性、表現技巧の緻密さなどが感じられる内容としました。

1. 空間表現 ～歌舞伎の世界Ⅰ～

歌舞伎は、先行芸能である能や狂言、人形浄瑠璃の影響を強く受け、物語を中心に演じられてきましたが、観客に喜んでもらうことを重要視したため、次第に神話や歴史上の人物が登場する場面

に当時の世相や事件を巧みに取り入れた演出や、庶民の恋愛、義理人情などの見せ場を多くした複雑な場面展開、架空のヒーローの登場など様々な演出の工夫がなされ個性的で多様なキャラクターが出現しました。



歌川豊国等画『戯子姿見』
蝦蟇（がま）の妖術を使う児雷也

2. 空間表現 ～歌舞伎の世界Ⅱ～

歌舞伎では、見る側を楽しませる様々な仕掛けや演出方法が考案されました。衣裳や鬘、化粧、小道具等では登場人物の性格をより分かりやすく表現するため、誇張や様式化が図られました。また、廻り舞台やセリ、花道やスッポン等の舞台装置や六方や見得など、独特の動きの表現が生み出されました。



歌川豊国等画『戯子姿見』
金井谷五郎と悪七兵衛景清

3. 画譜 ～挿絵から錦絵へ～

貸本として利用されることが多い絵入り本（絵

本)は、人気の決め手となった口絵や挿絵が重視され、次第に絵を主体とする絵手本(イラスト集)や、絵自体の鑑賞を目的として当時の風俗を描いた浮世絵が出版されるようになりました。

浮世絵の豊かな人物描写や自由で軽快な表現、錦絵(彩色木版画)に見られる大胆な構図や強調、明確な線描と平面的な彩色等は現代の漫画やアニメにも通じる表現技法となっています。



歌川豊国等画『東海道名所風景』

4. 絵本・絵巻 ～マンガとアニメの原点～

生き生きとした仕草や表情、人や物の動き、自由で豊かな表現、優れた描写力、絵画的な遊びなど、絵本と絵巻が持つ独特の表現技法と時間の経過や物語の内容を連続的に描き、物語の進行と共に一場面ずつ展開する表現方法は日本人独特の表現形式で、日本文化のなかに脈々と受け継がれているスタイルです。



『百鬼夜行』

そのため、絵本と絵巻はマンガやアニメのルーツともいわれています。

◆ 第3部「歩く」

江戸時代は、長く平和な時期が続きました。結果として武士の力は弱まり、庶民には余裕が生まれました。経済力のある町人の文化が上方で台頭、江戸では一般庶民のエネルギーあふれる文化が開花しました。そして江戸の文化は地方にも浸透していきました。

江戸時代は衣、食などの分野で民衆の生活が大きく変化し、新しい生活習慣が出来上がり、明治以降の社会に引き継がれ、重要な基盤となりました。

1. 江戸の名所

経済力を持った江戸の人々はエネルギーに行動しました。春には花見、潮干狩り。夏は隅田川の花火見物。秋は紅葉狩り。冬は歳の市。神社、仏閣の行事、縁日には年間を通じて出かけていきました。

花見は一本の桜を觀賞することから始まりましたが、次第に桜並木のような集合した桜のもとで、群衆が飲食を伴って觀賞するスタイルに変化していきました。八代将軍吉宗は、飛鳥山(北区)に江戸城内の桜を移植しました。御殿山(品川区)、隅田川堤、小金井堤にも植樹し、レクリエーションの場を提供しました。



葛飾北斎画『絵本東都遊』
飛鳥山の桜

園芸も発達し、花の名所といわれる場所に人々が集まりました。桜のソメイヨシノは、染井（豊島区）の植木職人が改良生産しました。

日本橋には魚河岸があり、関東・東北から鮮魚、海産物が荷揚げされ、問屋が連なり、陸路、水路の中心として活況を呈する賑わいでした。

名所巡りコースが設置されていたといわれ、地方から初めて江戸を訪れた人でも、地図、名所案内を片手に、気軽にでかけることができたそうです。

2. 江戸のグルメ

単身赴任者が多く、外食産業が発達し、握り寿司、蕎麦、天麩羅の屋台が誕生しました。公には肉食は認められていませんでしたが、猪や鹿肉の料理店が開業していました。簡単な茶飯を提供する料理屋から、次第に高級な料理の浅草「八百善」のような料亭も生まれました。

庶民の間には初物を競って求める風習があり、初鯉の季節には、我先にと買い求め、高い値がつけられました。



八百善亭主人編『料理通大全』
高級料亭 浅草の八百善

3. 吉原探訪

幕府公認の遊郭吉原は、隔離された区域で営業を行い、遊女には等級があり、花魁（おいらん）と呼ばれる高級遊女は、和歌・俳句の教養、琴・三味線の技芸が必要で、厳しい修業を積まなければなりません。

江戸後期になると、旗本・大名はもとより、一

般町民も通うようになります。人目をはばかり、武士は顔を隠し、坊主は医者に変装し出入りします。吉原門前には編み笠屋も生まれました。

ガイドブック的なものもあり、吉原の地図、店名、遊女の名、料金が書かれた便利なもので、隠れたベストセラーと言われました。



喜多川歌麿画『青楼絵抄年中行事』

4. ファッション事情

和服の原型となる小袖が発達し、カラフル化、大きな模様の着物へと変化しました。髪型の種類も多く、櫛・簪も広く発達しました。

鉛の白粉で顔を塗り、紅花からできた口紅を用いました。お歯黒、眉剃りの慣習もあり、髪型、化粧をみれば、女性の身分、年齢、職業がわかると言われました。履き物も変化し、下駄・草履の普及、活動に適した草鞋も流行しました。

リサイクル社会と言われる江戸では、庶民は着物を繰り返し着用し、古着市、古着店が数多くあったそうです。



奥田松伯軒撰『女用訓蒙図彙』

◆ 関連展示

メインの展示会場とは別に、図書館のエントランスホールに、今回のテーマに関連する展示コーナーを設けました。「マンガ的表現のルーツをたずねて」と題して、現代のマンガのルーツともいえる様々な絵図の表現技法、描写、構成が、数々の古典資料から感じ取れる展示としました。



渡辺華山『一掃百態』
ユーモラスな動きの人物群像

◆ 記念講演会

会期中の10月16日(土)、展示資料にちなんだテーマの記念講演会を開催しました。

「江戸小説の創り方 ～曲亭馬琴『高尾船字文』の場合～」と題して、本学国際文化研究科の石川秀巳教授から、江戸時代の小説が創られていく独特な過程をわかりやすくお話いただきました。

一般市民や研究者・学生など、約50名の参加者が熱心に聴き入っていました。

◆ おわりに

展示会場には会期中1,000名を超える来場者があり、「こんな資料の数々が東北大にあるとは知



らなかった。」「今日で6回めです。何度来ても楽しいです。」「一般市民への公開は、大学が地域にとけこむよい機会だと思う。」などの感想が寄せられ、好評のうちに終了しました。

図書館職員によるワーキンググループにより、テーマ設定から選書・解説作成、展示作業まで行いましたが、開催に当たりましては、学内外の関係各位に多大なご支援を賜りました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。また、会場に足を運んでくださった皆様、ありがとうございました。

平成23年度は、附属図書館が創立百周年を迎えます。これを記念して、さらに規模を拡充した特別展の開催を計画しています。どうぞご期待ください。

執筆担当：

〔第1部〕農学分館図書係 工藤 未来 (くどう みらい)

〔第2部〕医学分館運用係 南館 義孝 (みなみだて よしたか)

〔第3部〕情報管理課受入係 吉川 和幸 (きつかわ かずゆき)

若手の夢を職員企画ワークショップで実現！ ～国立大学図書館協会東北地区協会助成事業での試み～

(第1期スタッフ) 電気通信研究所図書係 吉植 庄栄
(第2期スタッフ) 情報サービス課 参考調査係 横山 美佳

1. 職員企画ワークショップとは？

職員企画ワークショップは平成21年度国立大学図書館協会東北地区協会助成事業として立案され、21年度(第1期)、22年度(第2期)の2カ年に渡って実施されました。

これは、自分たちが受けたと思う研修を、若手・中堅職員自身がワークショップ型で企画し、実施・評価までを行うというものⁱで、次の3つの狙いがありました。

- ①地区全体の事業という性格を生かし、東北6県の国立大学図書館からスタッフを募集することで、地区内の連携をさらに高める。
- ②日々の業務での小規模な提案や企画と異なる、大局的・体系的な企画・実施・評価を経験することにより、更に成長し、業務に役立てる。また、プロジェクトを成功させることで、その成功体験の喜びを味わい、次のステップに進むきっかけとする。
- ③若手・中堅が自ら研修会を企画することで、従来とは違った革新的な研修内容の創造が期待される。

さてその結果はどうだったのでしょうか？

次に第1期と第2期の内容を紹介することになります。

2. 第1期：「図書館員の時間管理術&お悩み解決大作戦 - 「時間がない」はもう言わない」

平成22年2月12日(金)、東北大学附属図書館を会場に、第1期ワークショップを開催しました。

若手・中堅層は、人員削減と反比例して進む業

務増加に直面しています。そのような環境の中、ではどのように業務量を減らす、もしくは効率よく行うことができるのでしょうか？

そこでこの研修会では、「ライフハック」ⁱⁱを切り口とした「時間管理・省力化術」を学び、図書館での実践者の事例を聞き、学んだことを元に班別討議で具体的な日常業務の改善を活発に議論しました。

「ライフハック」については、『情報ダイエット仕事術』等の著書で有名な堀正岳(ほり まさたけ)氏をお招きし、

- ・マルチタスクをしない。やるべきこと一つに集中する。
 - ・仕事の量に合わせて時間を目算するのではなく、時間の残りから仕事を当てはめる。
- といったアドバイスを頂きました。



図1 堀正岳氏講演

次に図書館での実践者として山中湖情報創造館の指定管理者館長である丸山高広(まるやま たかひろ)氏にお話を頂きました。

以上二つの講演を受けて、活発な班別討議や発表を行いました。当日は62名の参加があり、TwitterやUstream(最大視聴者数80人)での中継も行いました。

3. 第2期：「図書館を“マネジメント”する ～ 昨日を捨て、イノベーションを見つけよう！～」

平成22年12月8日（水）、東北大学附属図書館を会場に、第2期ワークショップを開催しました。

成長が鈍化し、停滞が続く社会情勢において、図書館もその例外ではありません。変わらなければならないという漠然とした意識を持ちながら、現状に囚われて、職員の熱意や向上心が成果として結びついていないと感じている方は多いと思います。

そこで、ドラッカー実践行動研究会の代表である宗初末（そう はつすえ）氏を講師に招き、講演・グループ討議を通じて、いかにして固定観念から脱却しイノベーションが達成できるか、また、



図2 宗初末氏講演



図3 グループ討議の様子

どのように個人の能力を組織の成果に結びつけていくかについて活発に議論を行いました。

講演の部には、大学図書館のみならず、公共図書館や企業等から、76名の参加がありました。また、講演の様子は第1期に引き続きUstreamでインターネット中継を行いました。

4. おわりに

第1期、第2期合わせて非常に多くの参加者が集まったこの職員企画ワークショップは、今までに無い斬新な内容であったと自負しています。またスタッフについても東北6県から第1期8名、第2期10名が集まり、地区一丸で事業を行ったという連帯感を生み出しました。今後地区内の次のステップに向けた活動につながって行くと考えています。

最後にこの機会を与えて頂いた、国立大学図書館協会東北地区協会と参加者の皆様に感謝の意を表したいと思います。

ⁱ 先行事例に次のような企画がある。

平成21年1月29日（木）於東京大学総合図書館「ad! ライブラリー～大学図書館効果的広報戦略～」

当企画については、石井百葉・小山美佳・小高栄美・佐藤千春・鈴木剛紀・高橋雅一・武内八重子・立石亜紀子・永峰由梨・堀池尚明「ワーキング・グループによる大学図書館職員研修の企画――「ad! ライブラリー――大学図書館効果的広報戦略」を企画・実施して（小特集 自立的な図書館活動）」、『大学図書館研究』（86），p. 11-p. 18，[2009.8]に詳しい。

ⁱⁱ 仕事術。効率良く仕事をこなして、人生の質も高めるための方策。

“ライフハック（ス）[外来語・カタカナ語2010年]”，現代用語の基礎知識，ジャパンナレッジ（オンラインデータベース），入手先〈<http://na.jkn21.com>〉，（閲覧日：2010年10月28日）

（よしうえ しょうえい）

（よこやま みか）

会 議

22.10.20 平成22年度第5回附属図書館運営会議

■協議事項

1. 平成22年度附属図書館時間外開館経費について
2. 本館資料貸出条件の変更について

■報告事項

1. 第65回東北地区大学図書館協議会総会について
2. 電子ジャーナル・コンソーシアムの連携強化について
3. 平成22年度部局評価について
4. 東北大学機関リポジトリへの学位論文登録について
5. 図書館ホームページの改訂について
6. 蔵書目録データベースの遡及入力について
7. 本館の開館時間延長と利用状況について
8. 全学授業「大学生のための情報検索術」について

22.12.6 平成22年度第6回附属図書館運営会議

■協議事項

1. 平成22年度第2回総長裁量経費について
2. 総長裁量経費による学生用図書の整備について

■報告事項

1. 諸会議について
 - ・ 第84次国立七大学附属図書館協議会について
 - ・ 国立大学図書館協会秋期理事会について
2. 平成22年度第5回学術情報整備検討委員会について
3. 電子ジャーナル・コンソーシアム連携組織について
4. 平成22年度部局評価について
5. 図書館の諸活動について
 - ・ 東北大学和算資料データベースに関する

ユーザ会について

- ・ 図書館情報処理システムの更新について
- ・ 図書館ホームページの改訂について
- ・ 平成22年度東北大学附属図書館企画展「クールジャパンのルーツをたずねてー江戸庶民の楽しみー」について
- ・ 国立大学図書館協会東北地区協会2010年度職員研修「図書館を“マネジメント”する～昨日を捨て、イノベーションを見つけよう！～」について

23.1.31 平成22年度第7回附属図書館運営会議

■協議事項

1. 公文書管理法に基づく歴史資料等保有施設の指定について
2. 「平成22年事業年度に係る業務の実績に関する報告書」等について
3. 平成23年度の学術情報の整備について

■報告事項

1. 諸会議について
 - ・ 国立七大学附属図書館長等臨時懇談会について
 - ・ シンポジウム「学術情報流通の改革を目指して4～大手出版社が考えるビックディール後の契約モデル～」について
2. 平成22年度第6回学術情報整備検討委員会について
3. 平成22年度第1回齋藤養之助家史料受入・整理検討委員会について
4. その他
 - ・ 新収「夏目漱石画幅」について
 - ・ 学生証の不正使用について
 - ・ 本館における盗難について

22.10.25 平成22年度第5回附属図書館商議会

■協議事項

1. 平成22年度附属図書館時間外開館経費について
2. 本館資料貸出条件の変更について

■報告事項

1. 第65回東北地区大学図書館協議会総会について
2. 電子ジャーナル・コンソーシアムの連携強化について
3. 平成22年度部局評価について
4. 東北大学機関リポジトリへの学位論文登録について
5. 図書館ホームページの改訂について
6. 蔵書目録データベースの遡及入力について
7. 本館の開館時間延長と利用状況について
8. 全学授業「大学生のための情報検索術」について

22.12.9 平成22年度第6回附属図書館商議会

■協議事項

1. 平成22年度第2回総長裁量経費について

■報告事項

1. 諸会議について
 - ・ 第84次国立七大学附属図書館協議会について
 - ・ 国立大学図書館協会秋期理事会について
2. 平成22年度第5回学術情報整備検討委員会について
3. 電子ジャーナル・コンソーシアム連携組織について
4. 平成22年度部局評価について
5. 総長裁量経費による学生用図書の整備について
6. 図書館の諸活動について
 - ・ 東北大学和算資料データベースに関するユーザ会について

- ・ 図書館情報処理システムの更新について
- ・ 図書館ホームページの改訂について
- ・ 平成22年度東北大学附属図書館企画展「クールジャパンのルーツをたずねて—江戸庶民の楽しみ—」について
- ・ 国立大学図書館協会東北地区協会2010年度職員研修「図書館を“マネジメント”する～昨日を捨て、イノベーションを見つけよう！～」について

23.2.1 平成22年度第7回附属図書館商議会

■協議事項

1. 公文書管理法に基づく歴史資料等保有施設の指定について
2. 「平成22年事業年度に係る業務の実績に関する報告書」等について
3. 平成23年度の学術情報の整備について

■報告事項

1. 諸会議について
 - ・ 国立七大学附属図書館長等臨時懇談会について
 - ・ シンポジウム「学術情報流通の改革を目指して4～大手出版社が考えるビックディール後の契約モデル～」について
2. 平成22年度第6回学術情報整備検討委員会について
3. 平成22年度第1回齋藤養之助家史料受入・整理検討委員会について
4. その他
 - ・ 新収「夏目漱石画幅」について
 - ・ 学生証の不正使用について
 - ・ 本館における盗難について

編 集 後 記

今までは、長い間にわたって図書館に蓄積された資料(コレクション)によるサービスが当然であると考えられてきました。また、そのための蔵書構築が重視されてきました。しかし、近い将来、必要とする資料がインターネットから直ぐに提供されるようになると図書館相互利用サービスという私の仕事や係はなくなってしまうかもしれません。一方で現在、収集し、蓄積している図書館の資料は将来にわたって利用され、一層輝きを増すでしょう。

「もっと近くに 煌めいて遠くへ」

東北大学附属図書館創立百周年。

1976 年に創刊され、主に教員や図書館員を対象として編集されてきた「木這子」は次の第 36 巻からデザイン及び内容を一新し、学生を対象とした年 3 回の広報誌に生まれ変わります。本号第 35 巻第 3・4 号は現在の形式の最終号となります。今までのご愛顧に感謝するとともに新生「木這子」をよろしくお願いいたします。



東北大学附属図書館報「木這子」第 35 巻第 3・4 号(通号 132 号)発行日 平成 23 年 2 月 28 日

発行人 片山 俊治 広報委員会委員長 加藤 信哉

発行所 東北大学附属図書館 〒980-8576 仙台市青葉区川内 27-1

電話 022-795-5911 FAX 022-795-5909

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>